嗜好の行動科学的研究(第6報)

——児童の嗜好行動と関連因子の類型化の試み——

熊 沢 昭 子, 東 愛 子^{*1}, 松 下 ツ イ 子^{*2}, 三 石 禮 子^{*3}
佐 藤 加 代 子^{*4}, 青 樹 久 恵^{*5}, 五 十 嵐 益 恵^{*6}, 小 川 安 子^{*7}
加 藤 栄 子^{*8}, 北 川 公 子^{*9}, 斎 藤 禮 子^{*10}, 篠 田 美 恵 子^{*11}
下 川 千 代 子^{*6}, 関 口 紀 子^{*10}, 副 島 敏 子^{*12}, 中 島 茂^{*9}
中 野 典 子^{*7}, 永 野 久 子^{*13}, 錦 萬 代^{*14}, 原 田 ま つ 子^{*15}

名古屋女子大学, ^{*1}栄養医学研究所, ^{*2}西南女学院短期大学, ^{*3}昭和女子大学, ^{*4}国立公衆衛生院, ^{*5}四天王寺
国際仏教大学, ^{*6}相模女子大学, ^{*7}相山女学園大学, ^{*8}淑徳短期大学, ^{*9}三重短期大学, ^{*10}東京家政大学,
^{*11}瑞穂短期大学, ^{*12}聖徳学園短期大学, ^{*13}高知学園短期大学, ^{*14}中津女子短期大学, ^{*15}武蔵野栄養専門学校

A Behavioral Study on Taste (Part VI)

——An Attempt at Classification in the Preference Behavior and Related Factors——

Akiko Kumazawa, Aiko Azuma^{*1}, Tsuiko Matsushita^{*2}, Reiko Mitsuishi^{*3}, Kayoko Satō^{*4}, Hisae Aoki^{*5},
Masue Igarashi^{*6}, Yasuko Ogawa^{*7}, Eiko Katō^{*8}, Kimiko Kitagawa^{*9}, Reiko Saitō^{*10}, Mieko Shinoda^{*11},
Chiyoko Shimokawa^{*6}, Noriko Sekiguchi^{*10}, Toshiko Soejima^{*12}, Shige Nakajima^{*9}, Noriko Nakano^{*7},
Hisako Nagano^{*13}, Mayo Nishiki^{*14} and Matsuko Harada^{*15}

Nagoya Women's University, ^{*1}Institute of Nutrition and Medicine, ^{*2}Seinan Jogakuin Junior College,
^{*3}Showa Women's University, ^{*4}The Institute of Public Health, ^{*5}International Buddhist University,
^{*6}Sagami Women's University, ^{*7}Sugiyamajogakuen University, ^{*8}Shukutoku Junior College, ^{*9}Mie Junior
College, ^{*10}Tokyo College of Domestic Science, ^{*11}Mizuho Junior College, ^{*12}Seitoku Gakuen Junior
College, ^{*13}Kōchi Gakuen Junior College, ^{*14}Nakatsu Women's Junior College, ^{*15}Musashino Professional
School of Nutrition

In order to study the behavioral pattern controlled by preferences for foods, we conducted a survey using questionnaire sheets on 3,016 school children concerning their intake of egg dishes. We analyzed the result statistically.

The results are as follows.

1) Those with strong desire for eating egg dishes were mostly those who liked egg dishes, but the frequency thereof was not necessarily high.

Those with less desire for eating egg dishes were mostly those who did not like egg dishes, and the frequency thereof was low.

2) There were more boys than girls who wanted to eat egg dishes, and the frequency thereof was high.

There were more infants than school children with strong desire for eating raw eggs, and the frequency thereof was high.

There were more of those who were healthy and robust, who had good appetite, who were obese, who were highly active, and who were independent among those with intense desire for eating and liking egg dishes.

3) There was no correlation whatsoever between the intensity of desire for eating egg dishes and the community the respondents lived in, their family structure, their position as regards to siblings

Key words : school children, egg dishes, behavior in taste, related factors, classification

児童, 卵料理, 嗜好行動, 関連因子, 類型化

in the family and whether their mothers held a job or not.

4) Infants relied on the sensation and school children on consciousness for liking or disliking the egg dishes. The reasons given for "liking the egg dishes" mainly concerned with the utility value of the dishes, while the reasons given for "disliking the egg dishes" were mostly emotional.

Their habitual intake of egg dishes depended on whether or not their family prepared the dishes.

The intensity of desire for eating the egg dishes was correlated with their behaviors like their having good appetite, readiness to come to the table at meal times, and even eating foods which they didn't like, and with their strong will of doing what they wanted to do.

Jpn. J. Nutr., 44 (6) 317~336 (1986)

はじめに

嗜好は食行動の過程に介在し、食行動に影響を及ぼす重要なものと考えられる。食行動とは、狭義では摂食行動をさすが、行動の概念としては総合性をもつものと思われるので、第1報¹⁾において述べたとおり、ここでも広義の食行動をさす。すなわち、“食”における内的な欲求を基盤とした意識下における反応も包含する人間の behavior と考える。

このような観点から、我々栄養指導研究会では嗜好の問題を取り上げ、嗜好を形成する因子を明らかにするために生理的、心理的、環境的、社会的な側面より検討し、また、嗜好の形成過程をも追求するための方法論として、まずは類型化を目的として調査研究を行ってきた。ここでいう類型化とは、嗜好行動に関わり合う個々の因子について類似点を抽出し、幾つかの特性因子としてまとめ、さらに嗜好行動に共通の関連因子として包括して表示する形式を作り出そうとするものである。

第1報¹⁾では女子学生を対象として、先にあげた諸因子のうち嗜好と深く関連する要因を確かめ、さらに嗜好の変化する時期などについて考察した。続いて第2～5報^{2)~5)}においては、ライフサイクルのうち、嗜好形成の初期にあたる幼児期に着目して、その嗜好形成過程と関連因子を追求した。

今回は対象を児童に移し、嗜好行動とその関連因子について検討することとした。

嗜好行動とは、嗜好の形成される過程と規定して、児童の食物に対する欲求や食体験および食物に対する好き嫌いの3つの方向より、その流れを把握しようとするものである。すなわち、嗜好行動は、生得的な食欲求あるいは食体験によって得られた習得的な食欲求が、個人の内部に現れ、それが各種の動因に刺激されて、“好き”あるいは“嫌い”といった嗜好表現に結びつくものと思われる。また、それらの“好き”あるいは“嫌い”といった嗜好が、欲求に反映されることも考えられる。

次に、嗜好行動と関連する因子として食物特性（食品、料理）、個人特性（性、年齢、生理、心理）、環境特性（地域、社会、家庭、人間関係）および行動特性（感覚、意識、摂食行動）などを取り上げることとした。

さらに、このような類型化された仮説を裏づけるために実態調査を行い、そのことを確かめた（表1）。

対象および調査方法

1. 対象

調査対象は、小学校5・6年生3,016名、そのうち男子1,530名、女子1,486名である。地域は東北・関東954名、東海・近畿1,274名、四国・北九州788名である。

表 1 嗜好行動と関連因子の類型化

このような調査の他に必要に応じて,3,016名のうちより事前調査を行った。事前調査は卵の位置づけをみるための各食品についての嗜好調査で,対象は東京都の小学校5・6年生71名(男子24名,女子47名)である。

2. 調査時期

1979年6～11月。

3. 調査内容

(1) 対象食品・料理

対象食品として卵を取り上げ,料理別に調査を行った。卵料理は先に行った幼児を対象とした調査²⁾と同じく,“生卵”,“ゆで卵”,“目玉焼”,“卵焼”,“茶わん蒸”,“プリン”の6種類とした。

(2) 欲求度,摂食頻度,嗜好度

嗜好行動を明らかにするために食欲求は欲求度として測ることとし,食体験は摂食頻度,食嗜好は嗜好度として,表1に示すような尺度を設けて調査項目とした。

(3) 嗜好度の選択理由

卵料理の“好き”あるいは“嫌い”の理由について自由回答とした。理由については感覚(味覚,混合味覚,

視覚, 嗅覚, 皮膚感覚, アレルギー), 意識 (感情, 価値観), 調理技術, 食習慣に分類した。なお, 皮膚感覚とは触覚, 圧覚, 温・冷覚などをさす。

(4) 関連因子としての調査項目

(i) 家庭環境

家族構成: 複合家族 (祖父母・親・子), 核家族 (親・子), その他

兄弟 (姉妹) 数, 順位: 1 人, 2 人, 3 人以上, 何番目

母親の就業: 勤めている, 勤めていない

(ii) 身体状況・健康状態

体格 (ローレル指数): るいそう傾向 (117以下), 標準 (118~148), 肥満傾向 (149以上)

体質: 丈夫, 食物アレルギー, 扁桃腺がはれやすい, 下痢しやすい, 便秘がち, かぜをひきやすい, めまいが起こりやすい, その他 (以上, 複数回答)

現在の健康状態: 健康, 時々病気になる, 病気がち

既往症: 大きな病気の有, 無

食欲: ある, 普通, あまりない

食事の喫食量: 多いほう, 普通, 少ないほう

睡眠: よく眠る, 時々目がさめる, 眠れないことが多い

日常の活動: よく動く, 普通, あまり動かない

(iii) 一般的性格特性

自分のやりたいことは必ずやる・やらないことが多い, 我がまま・がまんする, 負けず嫌い・おとなしい, いろいろなことを気にする・気にしない, ねばり強い・あきっぽい

(iv) 摂食行動

① 家庭における摂食行動

食卓へのつき方: すずんで食卓につく, 催促されて食卓につく, むらがある

テレビコマーシャルの受け止め方: テレビコマーシャルでみたものは必ず食べる, 時々食べる, 食べたいと思わない

嫌いなものがでた時: 残す, 家の人が食べているので食べる, 家の人にいわれるので食べる, 体が丈夫になるので食べる, 他に食べるものがない時は食べる

② 学校給食における摂食行動

喫食状況: 全部食べる, 時々残す, いつも残す

嫌いなものがでた時: 残す, 友達が食べているので食べる, 先生にいわれるので食べる, 体が丈夫になるので食べる, 他に食べるものがない時は食べる

③ 外での食事

外での食事: よくする (週 1 回以上), ほとんどしない

4. 調査方法

質問紙を用い, 調査の実施にあたっては小学校ごとに一定の時間を設け, 教室において児童に記入を求めた。

分析方法は, 百分率, χ^2 検定, スピアマンの順位相関および Hayasi 数量化Ⅱ類⁶⁾を用いた。

結 果 お よ び 考 察

1. 嗜好行動と関連因子

(1) 食物特性

嗜好行動に関連する多くの因子のうち、まず食物特性因子を取り上げて検討していくこととする。

(i) 食品の種類と料理

食品や料理の種類は多く、それに伴って嗜好も存在すると思われるが、今回は卵の料理を取り上げた。我々は、魚の料理についても同様に調査を行ったが^{7)~10)}、それによれば、魚の料理と卵の料理の嗜好度には違いがみられるものの、嗜好度と食欲求および食体験との関係やそれらに関連する因子にはかなり類似点が認められた。したがって、本研究は嗜好行動とそれに関連する因子についての類型化を図ることを目的としたので、幼児調査^{2)~5)}と同様に卵を取り上げた。これは幼児との比較が可能になることの他に、事前調査において多くの食品の中で卵の嗜好の位置づけをみた結果によるものである。それは児童の一番好きなものと一番嫌いなものをあげさせたところ、男女ともに好きなものは1位が肉類、2位が果物であった。嫌いな順位の1位は野菜であった。卵は、女子において好きの順位で7位、嫌いで4位であり、男子では好きにも嫌いにも出現しなかった。以上のことから、卵は児童の摂取する食品の中で極端な位置づけではないことが確かめられた。

また、全国的に出まわっていて手軽に入手でき常用されていること、価格が安定していること、国民栄養調査による年次推移をみても摂取量の変動が少ないことなどがあげられる。

豊川¹¹⁾は、地域集団が各種の食品群に対して示す“嗜好”を数量的に分析・評価するにあたって、食品群の摂取量と変動係数および帰帰からの変動などから食品群別に親和性指数を求めている。この親和性指数によれば、卵は米、しょうゆ、味噌、油脂類に次いで親和性の濃いほうの、いわゆる変動の少ない食品として位置づけられている。

卵料理として調査を行ったのは、卵という素材ではなく、食べる時の状態で調査したほうがイメージが具体的に答えやすく、また料理法によって差がある¹²⁾ものと考えられたからである。

① 卵料理別欲求度

卵料理に対する児童の欲求度は表2-1に示すとおりである。“生卵”、“プリン”を除く他のいずれの料理法においても、“時には食べたい”が高率を占め、次いで“いつも食べたい”が多かった。“生卵”、“プリン”はそれぞれ他と異なった傾向がみられ、“生卵”では“時には食べたい”が57.7%、次いで“他に何も無い時は食べる”が30.4%と約1/3を占め、“いつも食べたい”は9.1%と卵料理中最も低率であった。一方、“プリン”では“いつも食べたい”が65.6%、次いで“時には食べたい”が29.2%であり、極めて欲求度が高く、“生卵”と“プリン”は対照的であった。

② 卵料理別摂食頻度

卵料理に対する児童の摂食頻度を表2-2に示した。“目玉焼”、“卵焼”では“時々食べる”が最も多く、次いで“よく食べる”の順であり、“ほとんど食べない”ものの比率は低い傾向にあった。“ゆで卵”は“時々食べる”、“ほとんど食べない”、“よく食べる”の順であり、“よく食べる”は低率であった。“生卵”、“茶わん蒸”では“ほとんど食べない”が最も多く、特に“茶わん蒸”は61.6%と高率であった。

③ 卵料理別嗜好度

卵料理に対する児童の嗜好度は、表2-3に示すように、“好き”の順位は“プリン”、“卵焼”、“目玉焼”、“茶わん蒸”、“ゆで卵”、“生卵”の順であり、“嫌い”はほぼその逆となっていた。個々にみると、“生卵”は

表 2-1 卵料理別欲求度

(n=3,016)

料 理	いつも食べたい		時には食べたい		他に何も無い時は食べる		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
生 卵	273	(9.1)	1,739	(57.7)	916	(30.4)	88	(2.8)
ゆ で 卵	745	(24.7)	1,909	(63.3)	338	(11.2)	24	(0.8)
目 玉 焼	964	(32.0)	1,781	(59.1)	252	(8.4)	19	(0.6)
卵 焼	1,085	(36.0)	1,724	(57.2)	192	(6.4)	15	(0.5)
茶わん蒸	996	(33.0)	1,543	(51.2)	424	(14.1)	53	(1.8)
プ リ ン	1,977	(65.6)	882	(29.2)	141	(4.7)	16	(0.5)

表 2-2 卵料理別摂食頻度

(n=3,016)

料 理	よく食べる (週3回以上)		時々食べる (週1~2回)		ほとんど食べない		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
生 卵	373	(12.3)	1,082	(35.8)	1,527	(50.6)	34	(1.1)
ゆ で 卵	474	(15.7)	1,720	(57.0)	810	(26.9)	12	(0.4)
目 玉 焼	853	(28.2)	1,665	(55.2)	487	(16.1)	11	(0.4)
卵 焼	997	(33.1)	1,589	(52.7)	409	(13.6)	21	(0.7)
茶わん蒸	200	(6.8)	923	(30.6)	1,857	(61.6)	36	(1.2)
プ リ ン	531	(17.6)	1,265	(42.0)	1,207	(40.0)	13	(0.4)

表 2-3 卵料理別嗜好度

(n=3,016)

料 理	好 き		普 通		嫌 い		食べたことなし		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
生 卵	882	(29.2)	1,279	(42.4)	660	(21.9)	180	(6.0)	15	(0.5)
ゆ で 卵	1,662	(55.1)	1,142	(37.9)	203	(6.7)	2	(0.1)	7	(0.2)
目 玉 焼	1,898	(62.9)	952	(31.6)	153	(5.1)	4	(0.1)	9	(0.3)
卵 焼	2,074	(68.8)	833	(27.6)	97	(3.2)	3	(0.1)	9	(0.3)
茶わん蒸	1,832	(60.7)	795	(26.4)	283	(9.4)	100	(3.3)	6	(0.2)
プ リ ン	2,523	(83.7)	404	(13.4)	80	(2.7)	4	(0.1)	5	(0.2)

“好き”が29.2%と他の卵料理に比べて低率であり, “嫌い”は21.9%と他より高率であった。一方, “プリン”は“好き”が83.7%, “嫌い”が2.7%であり, 卵料理中“生卵”と“プリン”の“好き”と“嫌い”は欲求度と同様に対照的であった。“プリン”は, 卵料理とはいえ菓子類に属し, 既製品もかなり出まわっているのので一概にはいえないが, 今回は自家製か既製品かなどは考慮しなかった。

なお, 料理にはそれぞれ調理技術が伴う。各卵料理における“好き”あるいは“嫌い”の理由反応語から調理技術に関するものをみると次のとおりであった。“好き”な理由反応語としては, “半熟”あるいは“こんがり焼いてある”, “食べやすい”といった表現があり, “嫌い”な理由反応語としては, “なまなましている”, “なま焼け”, “食べにくい”といった焼き加減や食べやすさに関する理由反応語があげられていた。

*

これら欲求度, 摂食頻度, 嗜好度の相互関連を示したものが図1である。

図 1 卵料理別、欲求度・摂食頻度・嗜好度の関連

各卵料理について、“いつも食べたい”と答えた欲求度の高い群では、摂食頻度に関係なく“好き”の比率が極めて高かった。この傾向は第2報²⁾における幼児調査と同様であった。

“時には食べたい”と答えた群では、“いつも食べたい”群よりも“好き”の比率が低くなっており、摂食頻度との関連では摂食頻度が少ない群に好まれない傾向がみられた。

“他に何も無い時は食べる”と答えた欲求度が低い群では、“プリン”を除いて“嫌い”の比率が高く、摂食頻度が少ないほどその関連が強く認められた。特に、“生卵”において“嫌い”と“ほとんど食べない”との関連が顕著であった。

さらに、嗜好度と欲求度との関連を卵料理6種類についてスピアマンの順位相関でみると、“好き—いつも食べたい” $r_s=0.94$ ，“普通—時には食べたい” $r_s=0.83$ ，“嫌い—他に何も無い時は食べる” $r_s=0.98$ となり、いずれも有意の順位相関で嗜好度と欲求度との関連が深いことが認められた。

嗜好度と摂食頻度との関連では、“好き—よく食べる” $r_s=0.66$ ，“普通—時々食べる” $r_s=0.31$ ，“嫌い—ほとんど食べない” $r_s=0.60$ のいずれにも有意の相関は認められず、欲求度と嗜好度ほどの強い関連性はないものと思われる。しかし、他の卵料理とは若干異なった嗜好傾向を示す“プリン”を除外した順位相関では、“好き—よく食べる” $r_s=0.70$ ，“普通—時々食べる” $r_s=0.40$ に比べて、“嫌い—ほとんど食べない” $r_s=0.90$ の相関が高く、“嫌い”と“ほとんど食べない”には強い関連のあることが認められた。

これらのことから、欲求度の高い場合には、嗜好度“好き”との関連が強く、摂食頻度との関係は弱く、欲求度が低くなるにつれ、嗜好度、摂食頻度ともに低くなる関係が認められた。

児童の場合、摂食頻度は本人の意向よりもむしろ周囲の影響を受けやすく、用意されたものを食べる、いわば受け身の立場であることが多いため、欲求度および嗜好度が高いものでも摂食頻度が必ずしも多いとは限らないものと推測される。また、食欲が低い場合には食体験の少ないことも関連しているといえよう。

(2) 個人特性

性、年齢、生理的、心理的因子などを個人特性因子としてあげることとする。

(i) 性別にみた嗜好行動

各卵料理に対する欲求度を男女別にみると、全ての料理において男女間に有意の差があり($p<0.01$, プリ

図 2 性別にみた卵料理の嗜好度

図 3-1 年齢別にみた卵料理の欲求度

ンのみ $p < 0.05$), いずれも男子のほうが女子よりも欲求度の高いことが認められた。

摂食頻度では“生卵”, “ゆで卵”, “目玉焼” ($p < 0.01$), および“茶わん蒸”, “プリン” ($p < 0.05$)に有意の差が認められ, いずれも男子は女子よりも摂食頻度が高かった。“卵焼”には男女による差は認められなかった。

嗜好度については図2に示した。“茶わん蒸”, “プリン”を除いて, “生卵”, “ゆで卵”, “目玉焼”, “卵焼”は男女間に差が認められ ($p < 0.01$), いずれも男子は女子よりも“好き”と答えたものが多かった。

(ii) 年齢別にみた嗜好行動

第2報²⁾であげた3～5歳の幼児と, 本報における10～11歳の児童について欲求度, 摂食頻度, 嗜好度の比較を行い, 図3-1～3-3に示した。

“生卵”の欲求度は幼児が高く, “卵焼”には差がみられないが, 他の卵料理は全て児童のほうが高かった。

摂食頻度には違いがみられ, “生卵”, “卵焼”は幼児が多く, 殊にこれらを“よく食べる”ものの率は, “生卵”は児童の約2倍, “卵焼”は1.6倍であった。“ゆで卵”, “目玉焼”についても“よく食べる”ものの率でみると, 幼児のほうが若干上回っており, “卵焼”, “目玉焼”, “生卵”, “ゆで卵”など手軽な卵料理は幼児では回数多く与えられている。一方, “時々食べる”ものに着目すると, いずれの卵料理においても児童のほうが多い。このことは, 児童は幼児に比べてそれらの卵料理がいずれかに偏ることなく与えられていることが推測される。また, 卵以外の食品をより多く摂食しているとみることも, あるいは成り立つものと思われ, いずれにしても児童にとっては食体験の幅が広がったことを示唆するものと考えられる。

嗜好度についてみると, いずれの卵料理にも児童と幼児では差異が認められた。そのうち“生卵”は幼児に好まれており, “ゆで卵”, “目玉焼”, “卵焼”, “茶わん蒸”, “プリン”は全て児童のほうが好む傾向にあった。このように, 児童と幼児では嗜好行動にかなり相違が認められるが, この他にも食物の好みは年齢との関係が深いことがあげられている¹³⁾¹⁴⁾。また, 我々も第1報¹⁾において年齢により嗜好の変化することによふれたところでもある。

図 3-2 年齢別にみた卵料理の摂食頻度

図 3-3 年齢別にみた卵料理の嗜好度

(iii) 生理的因子と嗜好行動

嗜好行動における関連因子のうち、生理的因子は身体条件による直接的な関連因子となるものである。したがって、生理的因子は食欲の強弱と食体験、さらに食嗜好と深く関わりあって嗜好行動への内的要因として重要視すべきであると考えられる。

ここでは個人特性のうち生理的因子として、体格、体質、現在の健康状態、食欲、食事の喫食量、睡眠、日常の活動状況などの面から、卵料理に対する欲求度、摂食頻度、嗜好度との関連について検討した。

① 体格

身長や体重の記載が明確であった児童2,100名についてローレル指数による区分をすれば、るいそう傾向31.6%，標準44.1%，肥満傾向24.3%（ローレル指数160以上4%を含む）である。

体格別にみた卵料理の欲求度、摂食頻度、嗜好度は次のとおりである。

るいそう傾向者の欲求度については、いずれの卵料理においても、“いつも食べたい”とする者が肥満傾向者よりやや低率であったが、有意差には至らなかった。摂食頻度の違いはあまりみられなかった。嗜好度においては“プリン”を好む者が他よりやや多く、79.8%みられたが、その他の卵料理については肥満傾向者や標準者よりも低い嗜好率を示した。

肥満傾向者は他の者と比較して、“プリン”を除き欲求度、嗜好度の高いものが多く、摂食頻度もやや多い傾向がみられた。特にローレル指数160以上のものは、“生卵”以外の卵料理について“好き”、“いつも食べたい”という回答が高率であった。

肥満傾向者の好みについては、体格と嗜好についての研究¹⁵⁾でもいわれているが、我々の幼児の嗜好行動に関する研究²⁾においても同様の傾向が認められた。

② 体質

体質については、丈夫と答えたもの56.6%，かぜをひきやすいもの18.5%，扁桃腺がはれやすいもの11.7%，めまいを起こしやすいもの3.3%，食物アレルギーを起こしやすいもの3.2%，下痢しやすいもの2.4%，

便秘しやすいもの1.2%, その他3.1%であった。

一般に丈夫と答えたものは、他と比較していずれの卵料理においても欲求度、嗜好度ともに高く、“嫌い”の比率が低い傾向がみられた。特徴ある対象は、食物アレルギーと便秘がちのものであった。食物アレルギーのものは、“生卵”における欲求度は低く、摂食頻度では“ほとんど食べない”ものが60.7%と高率であり、これを嫌うものが29.9%と多い状況であった。ただし、“プリン”、“茶わん蒸”、“卵焼”については丈夫なものとの差はみられなかった。これは、“生卵”という素材を加熱調理して熱変性させるとともに、好まれる味に調味することによって受容性が高まるためと考えられる。便秘がちなのは“生卵”、“ゆで卵”、“目玉焼”、“茶わん蒸”に対する欲求度が低く、これらの料理を嫌うものが多い傾向がみられた。

③ 健康状態

健康と答えたもの71.7%, 時々病気するもの26.8%, 病気がちのもの1.5%であった。健康と答えたものは病気がちのものと比較して、欲求度、摂食頻度、嗜好度ともやや高い傾向にあり、嗜好度については“卵焼”以外の卵料理においてその傾向が強く認められた($p<0.01$)。

④ 食欲、食事量

食欲があるもの49.4%, 普通47.4%, あまりないもの3.2%と区分された。

食事量の多いもの31.8%, 普通62.1%, 少ないもの6.1%であった。

食欲があるものや食事量の多いものは、食欲があまりないものや食事量の少ないものと比較して、いずれの卵料理においても欲求度、嗜好度ともに有意に高いことが認められた($p<0.01$)。しかし、摂食頻度については差はみられなかった。

⑤ 日常の活動状況

日常の活動において、よく動くもの48.8%, 普通47.0%, あまり動かないもの4.2%であった。

日常よく動くものは、あまり動かないものと比較して、各卵料理とも欲求度は“いつも食べたい”とするものが多く、また、“好き”が高率で“嫌い”が低率であった($p<0.01$)。

このようなことは、活発な動きによりエネルギー消費量が増加し、それに伴って食物を受容する幅が広がるためであろう。摂食頻度では、“茶わん蒸”、“プリン”以外の卵料理において、よく動くものはあまり動かないものよりも多かった($p<0.01$)。

*

健康関連因子のうち、現在の健康状態がよく、丈夫な体質、食欲旺盛、食事量が多く、よく動くものは、病気がち、丈夫ではない体質、食欲があまりなく、少食、あまり動かないものより、欲求度や嗜好度が高いことは、健康状態が嗜好行動を左右する重要な因子であることを示唆している。

⑥ 卵料理の嗜好理由と健康関連因子

卵料理別に回答のあった“好き”と“嫌い”に対する理由反応語のうち、味覚、皮膚感覚、感情と健康関連因子との関係について、 χ^2 検定を行った。その結果、有意差の認められたものを表3に示した。ここでは、栄養教育上問題となりやすい“嫌い”に視点をあてて考察を試みる。

体格の面からみると、るいそう傾向のものは“嫌い”の理由として味覚と皮膚感覚をあげるものが多かった。

健康状態では、病気がちのものは“嫌い”の理由として感情への反応が強く、次いで味覚をあげるものが健康なものより多くみられた。

食欲については、食欲があまりないものはあるものに比べて、“卵焼”の“嫌い”の理由として味覚をあげ

表 3 卵料理の嗜好理由分類別，嗜好度と健康関連因子

<体格>

理由 反応語	卵料理の嗜好度		るいそう傾向		標準		肥満傾向		χ^2 値
			人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
味覚	生卵	好き	158	(79.4)	163	(90.1)	35	(94.6)	11.39**
		嫌い	41	(20.6)	18	(9.9)	2	(5.4)	
皮膚 感覚	ゆで卵	好き	33	(53.2)	32	(68.1)	49	(89.1)	17.75**
		嫌い	29	(46.8)	15	(31.9)	6	(10.9)	
	目玉焼	好き	25	(64.1)	26	(76.5)	47	(92.2)	10.68**
		嫌い	14	(36.9)	8	(23.5)	4	(7.8)	
感情	目玉焼	好き	71	(85.5)	29	(60.4)	7	(77.8)	10.67**
		嫌い	12	(14.5)	19	(39.6)	2	(22.6)	

<健康状態>

理由 反応語	卵料理の嗜好度		健康		病気がち		χ^2 値
			人数	(%)	人数	(%)	
味覚	ゆで卵	好き	561	(97.7)	180	(94.7)	4.45*
		嫌い	13	(2.3)	10	(5.3)	
	卵焼	好き	705	(98.2)	251	(95.4)	5.87*
		嫌い	13	(1.8)	12	(4.6)	
	プリン	好き	909	(98.4)	305	(95.3)	9.54**
		嫌い	15	(1.6)	15	(4.7)	
感情	ゆで卵	好き	48	(76.2)	13	(48.1)	6.81**
		嫌い	15	(23.8)	14	(51.9)	
	卵焼	好き	61	(91.0)	12	(60.0)	11.03**
		嫌い	6	(9.0)	8	(40.0)	
	目玉焼	好き	55	(75.3)	16	(53.3)	4.85*
		嫌い	18	(24.7)	14	(46.7)	

るものが多くみられた。

日常の活動では，あまり動かないものは“生卵”，“茶わん蒸”の“嫌い”の理由として味覚をあげるものが高率を示した。

このように，食欲がなく，動きの少ないものは感情よりも味覚そのものに反応していることが察せられる。

(iv) 心理的因子と嗜好行動

嗜好行動には心理的な因子が深く関与するものと考え，心理的因子のうち一般的性格特性および自主性が嗜好行動にどのように関連しているかを検討した。

㊦ 一般的性格特性と嗜好行動

調査方法であげた一般的性格特性の各項目と，欲求度，摂食頻度，嗜好度の関連をみた結果，欲求度と摂食頻度および嗜好度については，積極的性格特性集団は“いつも食べたい”，“よく食べる”，“好き”が，それぞれ消極的性格特性集団に比べてやや多い傾向がみられた。このことは幼児と同様な結果⁴⁾であった。すなわち，

<食欲>

理由 反応語	卵料理の嗜好度		食欲がある		食欲があまりない		χ^2 値
			人数	(%)	人数	(%)	
味覚	卵焼	好き	543	(98.9)	29	(85.3)	31.54**
		嫌い	6	(1.1)	5	(14.7)	

<日常の活動>

理由 反応語	卵料理の嗜好度		よく動く		あまり動かない		χ^2 値
			人数	(%)	人数	(%)	
味	生卵	好き	224	(90.7)	11	(68.7)	7.63**
		嫌い	23	(9.3)	5	(31.3)	
覚	茶わん蒸	好き	393	(95.2)	120	(74.1)	20.13**
		嫌い	20	(4.8)	7	(25.9)	

** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

性格特性の積極的と思われる集団に“好き”の回答比率が、消極的と思われる集団に比べて高いことが認められていたことと一致する。

② 自主性と嗜好度

自主性については、石川、藤原の自主性診断検査法¹⁶⁾を用いて、本調査対象のうちより四国・北九州の男子 258 名、女子 270 名について行った。

自主性診断検査の特徴は、図 4 の領域にあげた 10 種の特性が自主性を構成し、これを支える最も基本的なものであり、これらが相互に関連し合いながら統合されて自主性を形づくるものと考えられている¹⁶⁾。これらの特性を測定するために、特性の各項目ごとに 12 の検査問題が作成されている。これら合計 120 問の回答結果によって、特性の各項目の粗点を加えた総計粗点から個人のパーセンタイルを換算表¹⁶⁾によって診断し、自主性 80%-tile 以上、自主性中間、自主性 20%-tile 以下に区分される。

自主性区分と各々の特性粗点の平均粗点と標準偏差、そして自主性の平均点と標準偏差は図 4 に示すとおりで

図 4 自主性と各特性粗点、平均点と標準偏差

ある。

各特性粗点は、自主性の高いほうへ明らかに比例して高い方向を示している。本検査の妥当性については、石川・藤原によって自主性 80%-tile 以上と 20%-tile 以下の違いが学業成績や、矢田部・ギルフォード性格検査結果とも関連することが報告¹⁴⁾されている。

自主性の高い群と低い群について、卵料理の嗜好度の比較を図 5 に示した。これによると、“生卵”の“好き”は卵料理中最も低い 25%であり、“嫌い”は 13%であった。“プリン”は、“生卵”とは対照的であり、“好き”は 62%，“嫌い”は 4%であった。しかし、女子の自主性 20%-tile 以下の低い群に、“プリン”より“茶わん蒸”の“好き”が多かった。総じて自主性 80%-tile 以上の高い群に、“好き”比率が高く、“嫌い”の比率は低い傾向を示していた。

以上のことから、自主性も嗜好行動に関連のあることが認められた。

(3) 環境特性

環境特性としては、地域、社会（家庭）環境などがあげられる。

地域は、東北、関東、東海、近畿、四国、北九州について嗜好行動との関連をみたところ、東北と四国の欲求度、嗜好度“好き”においてやや特徴がみられた。それは、他の地域に比べていずれの卵料理も低い傾向にあった。摂取頻度においては差がみられなかった。

家庭環境の中の家族構成では、複合家族に比べ核家族は欲求度、嗜好度“好き”がわずかに高く、摂取頻度では差がなかった。

兄弟の数、順位による違いは認められなかった。

母親の就業の有無別でも差がみられなかった。このことは、幼児の調査²⁾において顕著な差がみられただけに、児童の成長による母親離れがうかがえる。

人間関係においては、家族、教師、友達との関係があげられるが、これについては行動特性の項で後述する。

(4) 行動特性

人間の行動においては、食物や環境などからの刺激が、感覚情報として受け取られ、知覚により形やパターンにまとめられてイメージを構成し、それが目にみえる行動として表現されると考えられているが、我々は、目にみえない行動も含めて一連の行動特性としてとらえ、感覚、意識、食行動などの因子を行動特性として位置づけてみた。

(i) 感覚と意識からみた嗜好行動

嗜好行動に関連する因子のうち、内面に介在する感覚と意識構造については、卵料理の“好き”、“嫌い”の

図 5 自主性と卵料理の嗜好度（男子）

図 6 卵料理の嗜好理由分類別出現分布状況

理由反応語を感覚（味覚，混合味覚，視覚，嗅覚，皮膚感覚，アレルギー），および意識（感情，価値観）に分類して，その理由反応語の出現状況を検討した。

① 卵料理別にみた嗜好理由の回答率

卵料理別にみた“好き”，“嫌い”についての理由をみると，回答率の高かったのは“プリン”の52.7%，次いで“茶わん蒸”，“卵焼”，“目玉焼”，“ゆで卵”，“生卵”の順となり，“生卵”が35.3%と最も低い回答率であった。これは，児童の“好き”傾向の高い卵料理ほど回答率も多く，これに応じて関心度の高いことが推測される。このような結果は第5報⁵⁾における幼児と母親の調査と一致するところであった。

② 卵料理別にみた嗜好理由の出現状況

卵の料理別にあげられた“好き”，“嫌い”についての理由を，感覚的側面と意識的側面から，その分布を図6に示した。感覚的側面において理由反応が高いのは味覚であり，他を大きく離して1位にあげられる。次いで，皮膚感覚，混合味覚，アレルギー，嗅覚，視覚であり，また，意識的側面では感情，価値観の順であった。

さらに，“好き”と“嫌い”別にみると，いずれの料理法においても“好き”の理由の1位は感覚的側面では味覚，“嫌い”は皮膚感覚であった。視覚は“好き”，“嫌い”の理由ともに低い出現状況であった。

意識的側面では“好き”よりも“嫌い”の理由として感情がかなりあげられていた。価値観は“好き”の理由としてはいくらかみられるが，“嫌い”の理由としてはほとんどあげられていなかった。

卵料理別に“好き”な理由の順位を味覚についてみると，“プリン”，“卵焼”，“目玉焼”，“茶わん蒸”，“ゆで卵”，“生卵”の順であった。

“嫌い”の理由に多くあげられている感情について、卵料理の順位をみると、“生卵”、“目玉焼”、“茶わん蒸”、“ゆで卵”、“卵焼”、“プリン”の順であった。また、皮膚感覚については、“ゆで卵”、“生卵”、“目玉焼”、“茶わん蒸”、“卵焼”、“プリン”の順にあげられ、いずれも“生卵”、“ゆで卵”について“嫌い”の理由をあげるものが多かった。

幼児⁵⁾と児童を比較すると、“好き”の理由として味覚をあげるものが両者ともに1位であることは共通している。次いで、幼児は混合味覚となっているが、児童では感情が2位であった。興味深いことは、価値観が幼児では7位であったのが、児童では4位となり、感覚的側面より意識的側面への移行がみられたことである。

卵料理別に好きな理由を味覚についてみると、幼児では“ゆで卵”、“生卵”に反応しているのに比べ、児童は“プリン”、“卵焼”に反応しているものが多かった。

“嫌い”の理由としては、幼児は感覚的側面である皮膚感覚をあげ、次いで意識的側面である感情の順であるが、児童は皮膚感覚もみられるが、感情をあげるもののほうが多かった。

卵料理別に“嫌い”の理由をみると、幼児、児童のいずれも“生卵”や“ゆで卵”に対して多く出現しており、“プリン”についての出現は少ないことが一致していた。

③ 卵料理の嗜好理由反応語

卵料理別“好き”、“嫌い”の理由のうち、感覚的側面から“好き”に対する理由反応語は次のようにあげられていた。味覚と混合味覚：おいしい、あっさりしている、甘い、ごはんにかけておいしい。皮膚感覚：つるつるしている、とろっとしている、ポコポコしている、ほかほかしている、プリプリしている、など。

“嫌い”に対する理由反応語は次のとおりである。味覚：まずい、味が無い、白身がまずい、黄身がまずい。嗅覚：生臭い、変な臭い。皮膚感覚：ぬるぬるしている、ベチャベチャしている、どろどろしている、モゾモゾしている、かさかさしている、などがあげられていた。

意識的側面から“好き”に対する理由反応語は次のようにあげられていた。感情：なんとなく、かわいい、卵料理が好き、黄身が好き、など。価値観：健康によい、栄養がある、たん白質が多い、手軽に作れる、おかずに合う、など。“嫌い”に対する反応語としては、感情：気持ちが悪い、ひよこになりそう、ねばねばしている。価値観に類するものはほとんど現れていなかった。また、幼児⁵⁾においては卵黄、卵白に対する反応語が多くみられたが、児童ではわずかしき出現しなかった。

(ii) 食行動と嗜好行動

㊴ 食習慣

嗜好行動との関連において食習慣は重要な因子であると考えられる。

食習慣を表す理由反応語からみると、“好き”な理由反応語としては、毎日食べる、よく作ってくれる、時々作ってくれる、いつも買ってきてくれる、食べ慣れている、などがあげられ、これらはいずれの卵料理にも万遍なく出現していた。

一方、“嫌い”の理由反応語としては、“生卵”は食べないとか、“茶わん蒸”はあまり作ってくれないなどが多くみられた。

㊵ 摂食行動

児童が意識的あるいは無意識的であろうと、摂食のために起こす行動の実態をとらえ、その行動のありさまを検討して摂食行動を表す指標を得ることとした。さらに、その摂食行動を表す指標を用いて嗜好行動との関連をみた。

表 4 摂食行動の要因相互の関連

		すすんで 食卓につく		催促されて 食卓につく		むらがある	
		人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
テレビ レシ たも ビ ャ ル の マ で	必ず食べる	86	(6.3)	32	(3.4)	16	(3.3)
	時々食べる	1,035	(75.6)	707	(75.4)	395	(80.3)
	食べたいと思わない	249	(18.1)	199	(21.2)	81	(16.4)
家の 庭が で 嫌 い な も	残す	361	(29.1)	349	(40.1)	174	(38.4)
	家の人が食べているので食べる	185	(14.9)	95	(10.9)	50	(11.0)
	家の人にいわれるので食べる	272	(22.0)	244	(28.0)	117	(25.8)
	体が丈夫になるので食べる	352	(28.4)	140	(16.1)	76	(16.8)
	他に食べるものがない時は食べる	69	(5.6)	43	(4.9)	36	(8.0)
学 校 の 給 食 が 食 で た 嫌 い な	残す	204	(14.9)	210	(22.5)	70	(14.0)
	友達が食べているので食べる	297	(21.7)	221	(23.7)	131	(26.1)
	先生にいわれるので食べる	112	(8.2)	86	(9.2)	46	(9.2)
	体が丈夫になるので食べる	511	(37.3)	243	(26.1)	120	(24.0)
	他に食べるものがない時は食べる	244	(17.9)	172	(18.5)	134	(26.7)

＜児童の摂食行動を表す指標＞

児童が家庭や学校給食の場で示す摂食に関わる行動は多様であるが、ここでは、食卓へのつき方や社会的に新奇なものに対する興味としてテレビコマーシャルの受け止め方、また家庭の食事で嫌いなものがでた時の対応、および学校給食で嫌いなものがでた時の対応などの要因を取り上げて、相互の関連をみた。南¹⁷⁾は、欲求充足が人間の行動の目標であるとすれば、その目標に達するための手段が行動の経過を大きく左右することになると述べている。そこで我々は、食物摂取の最も端的な行動となる食卓へのつき方を指標として用いることとした。以下、“すすんで食卓につく”、“催促されて食卓につく”、“むらがある”の3群に区分して、その他の摂食に関わる諸要因との関連を表4に示して、まずはその妥当性を検討した。

“すすんで食卓につく”群は、テレビコマーシャルでみたものは“必ず食べる”ものの率が、“催促されて食卓につく”群や“むらがある”群に比べて多い傾向がみられた。家庭の食事で嫌いなものがでた時は、“残す”という回答が他の群より少なく、“体が丈夫になるので食べる”という自覚の強いものがかなりみられた。また、学校給食で嫌いなものがでた時の対応としては、“体が丈夫になるので食べる”ものの率が多いことが特徴としてあげられる。

“催促されて食卓につく”群は、テレビコマーシャルでみたものを“食べたいと思わない”とするものの率が多くみられた。家庭の食事で嫌いなものがでた時は、“残す”というものが40%出現し、それに次いで“家の人にいわれるので食べる”となっており、嫌いなものに対する取り組みは消極的といえよう。学校給食で嫌いなものがでた時には、“体が丈夫になるので食べる”あるいは“友達が食べているので食べる”率はかなり多いものの、“残す”のは他の群よりも多かった。

“むらがある”群は、テレビコマーシャルでみたものは“食べたいと思わない”ものの率が他の群より少なかった。家庭の食事で嫌いなものがでた時の対応は“催促されて食卓につく”群とほぼ近い状況となっていた。学校給食で嫌いなものがでた時の対応としては、“残す”ものの率は“すすんで食卓につく”群と同様であるが、“体が丈夫になるので食べる”ものは低率で、“すすんで食卓につく”群とはかなり異なっていた。また、

図 7-1 卵料理別、欲求度と摂食行動

“他に食べるものがない時は食べる”という消極的なものが他の群よりも多くなっていた。

なお、ここで児童の嫌いなものへの対応について家庭の食事と学校給食を比較してみると、かなり相違していることが明らかとなった。それは、家庭の食事に比べて学校給食では“残す”ものの率が低く、“体が丈夫になるので食べる”という回答が多くなっていた。また、この時期には家庭の食事における家の人の影響よりも、学校給食での友達との関わりの方が、嫌いなものを食べることににおいては影響が大きいものと思われる。

<摂食行動と嗜好行動との関連>

先に摂食行動を表す指標として検討した児童の食卓へのつき方と嗜好行動、すなわち、欲求度、摂食頻度、嗜好度との関連を示したものが図7-1～7-3である。

欲求度と食卓へのつき方との関連では、“すすんで食卓につく”群は全ての卵料理において“いつも食べたい”というように欲求度が高いことが認められた ($p<0.01$)。

摂食頻度と食卓へのつき方では、“すすんで食卓につく”群では、“催促されて食卓につく”群や“むらがある”群と比較して、“あまり食べない”とするものが少ない傾向にあった。特に、卵料理のうち“生卵”，“ゆで卵”，“目玉焼”，“プリン”において差が認められた ($p<0.01$)。

嗜好度と食卓へのつき方では、“すすんで食卓につく”といった摂食行動が積極的な児童は、卵料理のいず

図 7-2 卵料理別、摂食頻度と摂食行動

図 7-3 卵料理別、嗜好度と摂食行動

れにおいても“好き”な回答を示すものが多く、“嫌い”な回答が少ない状況がみられ、“催促されて食卓につく”や“むらがある”群との間に差が認められた ($p < 0.01$)。

以上のように、児童の摂食行動を表す指標として食卓へのつき方を用い、その区分によって卵料理に対する嗜好行動との関連をみた結果、自発的に食卓につくような摂食行動を示す児童は嗜好行動においても積極性を示し、他動的かつ受動的な摂食行動を表すものは嗜好行動においても消極的であることが認められた。

(5) 嗜好行動と関連因子のパターン化

先に、児童の嗜好行動とその関連因子について検討してきた中から諸因子を取り上げ、因子相互の類似性よりみたパターン化を試みて、嗜好行動と関連因子の位置づけを明らかにしたい。

ここでは Hayasi 数量化Ⅱ類⁹⁾を適用した。

(i) 外的基準と説明変数

Hayasi 数量化Ⅱ類の外的基準としては、児童の卵料理に対する欲求度と嗜好度を用いた。

ここで扱った卵料理の欲求度と嗜好度については、回答の総合化をはかるために各々の卵料理ではなく、次のような方法とした。

欲求度については卵料理 6 種類（生卵、ゆで卵、目玉焼、卵焼、茶わん蒸、プリン）のうち、“いつも食べたい”と答えた卵料理が 4 種類以上ある場合は“欲求度が高い”とし、“他に何も無い時は食べる”という回答が 3 種類以上ある場合は“欲求度が低い”とし、それ以外は全て“普通”として扱った。

嗜好度については卵料理 6 種類のうち、“好き”が 4 種類以上の場合を“好き”とし、“嫌い”が 3 種類以上ならば“嫌い”とし、その他を“普通”とした。

説明変数としては、嗜好行動との関連因子のうち、15要因41カテゴリーとした。

これらの成績に基づいて以下のような嗜好度と欲求度からみた児童の特性因子のパターン化を行った。

(ii) 卵料理の欲求度と嗜好度に対する児童の特性因子の数量化による位置づけ

児童の欲求度と嗜好度よりみた各因子の親近性の度合は、図 8 に示すとおりである。卵料理の嗜好度を x 軸とし、“好き”な方向を右側、“嫌い”な方向を左側とし、卵料理の欲求度を y 軸とし、上側方向は欲求が高い方向で、下側方向は欲求が低い方向を示す。

性別、食欲、性格、家庭や学校給食における摂食行動因子についてプロットした結果、これらの因子はかなり明確に集約されて一定の傾向を示した。つまり、欲求度と嗜好度がともに高い方向に位置づけられるのは、“食欲がある”児童で、性別は“男子”、家庭での摂食行動は食事の時“すすんで食卓につく”、学校給食においては嫌いなものであっても“体が丈夫になるので食べる”、性格では“気にしない”・“自分のやりたいことは必ずやる”というように主体性に富んだ行動的な男子像が浮き彫りにされた。一方、嗜好度も欲求度も低い方向では、“食欲はあまりない”児童で、性別は“女子”、家庭での摂食行動は食事の時“催促されて食卓につく”、学校給食で嫌いなものがでた場合には“残す”・“友達が食べているので食べる”といった摂食行動をとり、先にあげた欲求度および嗜好度の高い因子に対して対照的な因子が現れ、自分のやりたいことも“やらないことが多い”といった消極的な性格を表す因子が集約された。

*

以上のように、卵料理における児童の嗜好行動に関連ある因子の数量化を行った結果、因子相互の類似性からみてかなり明確なパターン化が成り立った。

図 8 卵料理の嗜好度と欲求度に対する児童の特性因子の数量化による位置づけ

2. 嗜好行動と関連因子の類型化

我々は、嗜好行動に関する因子の類型化の第1段階として、はじめに述べたような仮説を設定し、その裏づけのために、幼児^{27)~55)}・児童を対象に実態調査を行ったが、その目的は、ほぼ達成されたものと考えられる。

嗜好行動を形成する食欲、食体験、食嗜好は、相互に関連の深いことが確かめられた。ただし、食体験については保育者側より与えられた受動的なものということで他因子との間に不自然な結果が生じたが、子どもの場合は、これも現実として踏まえることが必要であろう。

関連因子の中の食物特性については、今回は前に述べたとおり卵料理についてのみの調査であったので、他の食品では若干違いがみられることであろう。

個人特性としては、各年齢によって反応は異なるものと考えられる。

環境特性については、デテールの充実をはかることが必要かと考えられる。

行動特性の中の感覚と意識は、理由反応語による確かめであるが、これは対象の発達段階や調査食品によってかなり異なるものと推測される。特に意識的側面のデテールを充実する必要がある。

食行動については、関連因子仮説のデテールとともに調査項目の充実が望まれる。

以上のことから、関連因子と調査項目相互の充実がさらに類型化の達成に寄与するものと考えられる。

要 約

食物に対する嗜好によって支配される行動を研究するため、児童3,016名を対象に、卵料理の摂取について、質問用紙に記入させる方法で調査を行い、結果を統計的に解析した。

結果は以下のとおりである。

1) 卵料理を食べたいという欲求の強い者は、それを好む者が多かったが、摂取頻度は必ずしも高くはなかった。

卵料理を食べたいという欲求が低い者には、それを好まない者が多く、摂取頻度は低かった。

2) 男子は女子よりも卵料理を食べたいという欲求の強い者が多く、摂取頻度も高かった。

幼児では児童よりも“生卵”を食べたいという欲求の強い者が多く、摂取頻度も高かった。

健康で丈夫な者、食欲が旺盛な者、肥満している者、よく動く者、自主性の高い者には、卵料理を食べたいという欲求の高い者、卵料理が好きな者が多かった。

3) 卵料理を食べたいという欲求が強いかどうかは、居住地域、家族構成、兄弟のうちの何番目か、母親が働いているか否かに関係はなかった。

4) 卵料理が好きか嫌いかは、幼児では感覚に関連する理由、児童では意識的な判断に基づく理由による者が多かった。“卵料理が好きである”理由としては、その有用性に関連したもの、“嫌いである”理由としては、それに対する感情に関連したものが多かった。

卵料理を習慣的に摂取するか否かは、家族がそれを作ってくれるか否かによって支配されていた。

卵料理を食べたいという欲求の強いことおよび卵料理が好きであることは、食欲があり、食事の時にはすすんで食卓につく、嫌いなものでも食べる等の行動や細かいことを気にしない性格、やりたいことは必ずやる性格と関連していた。

*

本報告の要旨は第27回、第29回および第31回日本栄養改善学会において発表した。

文 献

- 1) 金野新次, 他: 栄養学雑誌, **33**, 169~193 (1975)
- 2) 斎藤禮子, 他: 栄養学雑誌, **37**, 275~288 (1979)
- 3) 熊沢昭子, 他: 栄養学雑誌, **38**, 3~16 (1980)
- 4) 松下ツイ子, 他: 栄養学雑誌, **38**, 79~95 (1980)
- 5) 東 愛子, 他: 栄養学雑誌, **38**, 97~111 (1980)
- 6) 三宅一郎: SPSS 統計パッケージII 解析編, p. 180 (1977) 東洋経済新報社
- 7) 中島 茂, 他: 第27回日本栄養改善学会講演集, pp. 121~122 (1980)
- 8) 青樹久恵, 他: 第29回日本栄養改善学会講演集, pp. 142~143 (1982)
- 9) 錦 萬代, 他: 第29回日本栄養改善学会講演集, pp. 144~145 (1982)
- 10) 三石禮子, 他: 第29回日本栄養改善学会講演集, pp. 146~147 (1982)
- 11) 豊川裕之: 日本公衛誌, **16**, 639~644 (1969)
- 12) 松平敏子, 佐々木郁子, 他: 栄養学雑誌, **33**, 73~77 (1975)
- 13) 山口和子, 高橋史人: 調理科学, **13**, 289~295 (1980)
- 14) 山口和子, 高橋史人: 調理科学, **15**, 104~113 (1982)
- 15) 大桑哲男, 佐藤祐造, 他: 総合保健体育科学, **4**, 113~118 (1981)
- 16) 石川 勤, 藤原喜悦: 自主性診断検査解説 (1979) 金子書房
- 17) 南 博: 人間行動学, p. 192 (1981) 岩波書店

(受付: 昭和61年 3月26日)